

良き縁に恵まれ、良き道を整えていく。

清掃業の経営に生かす教え。

(この記事は『やくしん』2020年8月号に記載された「経営に生きる、経営に活かす(第八回)」の記事を転載しております。役職等は当時のものです。)

ひかりきぎょう
有限会社 光企業 代表取締役 ほりこしとしお
堀越敏夫さん



有限会社光企業の代表取締役である堀越敏夫さんは、七十四歳という年齢を感じさせないほど活力に満ちているのが印象的だ。経営者として苦境を乗り越えられた背景には、立正佼成会の教えがあったという。清掃業を営む堀越さんの心持ちや行動から、会社を未来へ紡ぐヒントを得る。

時代の流れ、人のご縁に

素直に反応する

茨城県取手市にある「有限会社光企業」は、取手市や龍ヶ崎市を中心に、一般廃棄物や産業廃棄物の収集運搬、下水や側溝の清掃、下水道の水路の調査業務を行なっている。社員は、廃棄物の回収に当たる現場担当十二名と事務作業担当二名。十五台の廃棄物収集運搬車を有し、一日に三十トンから四十トンもの廃棄物を回収している。

「光企業」を興す三十年前、堀越さんは二十七歳で、父と共に道路清掃事業を行なう「株式会社光商社」を設立した。都内で道路清掃作業員として働いていた堀越さんの父が、親会社から、傘下で清掃事業の起業を提



案されたことで、当時、玩具メーカーの工場に勤務していた堀越さんも会社の立ち上げに加わったのだ。

最初は建設省（現国土交通省）の委託を受けて、東京都の下水清掃を担うことからスタートした。建設省が定める水質基準などは非常に厳しいものだったが、光商社は一つひとつの仕事を丁寧に行ない期待に応えた。五年後、積み重ねた経験を武器に、地元の取手市の下水清掃事業に参入。当時の藤代町の町長から

「光商社は舐めるようにきれいに清掃をしてくれる」といった賞賛を受けるなど、厳しい基準も確実にクリアし、次第に事業を拡大させていった。

バブル経済期の一九八〇年代後半、人材不足の時代が到来すると、堀越さんは「これからは女性の社会進出が加速していくだろう」と見込み、きめ細やかな女性目線を生かせるビルメンテナンス事業を開始した。早速、茨城県南部にある利根町庁舎の清掃業務の委託を受けた。積極的に採用した若年層の女性スタッフの活躍により、庁舎内の職員たちとの交流が生まれ、庁舎内に明るさをもたらすなど、清掃業における「きつい」「汚い」「危険」といった「3K」のイメージを一変させた。ほかにも藤代町庁舎の清掃も担うことになり、会社は順調に成長していった。



収集運搬の車両は、光企業の宣伝になる大切な商売道具だからこそ、常に手入れされきれいな車両を保っている。

苦境を好機に

変えてくれた教え

着実に業績を伸ばしていた光商社だったが、突如試練が降りかかった。東京で展開していた下請け仕事の減少により、自社も危うくなるのではと不安を抱いた社員たちが労働組合を結成し、会社に対して団体交渉を申し入れてきた。堀越さんは「労働組合が結成されたと聞いたときは、〈会社が潰れてしまうのではないかと背筋が寒くなりました」と当時をふり返る。〈労使交渉で決裂することがあれば、ストライキが起きて会社が立ち行かなくなるのではないかと。いっそのこと、廃業したほうがよいのではないだろうか〉。そんな考えが頭をよぎっ



会社の目の前にある高い堤防から、利根川に合流する小貝川や町を見渡すことができ、美しい景観が広がっている。



父と堀越さんが設立した光商社は、光企業に隣接している。

たという。

会社にとって最も困難な状況に直面したが、堀越さんはこれを自身の考えを改めるチャンスと捉え、会社経営を丁寧に見直していく。

「立正佼成会では、『自分が変われば、相手が変わる』と教えられています。そこで、労使交渉の場では会社側の主張を押し通して妥結を目指すのではなく、まず自分たち会社側が相手の要望を聞き、そのうえで

互いが満足できる内容を伝えることで妥結の道を開いていくようにしたんです」

その姿勢に徹し続けた結果、今でも会社と労働組合との関係は良好だ。立正佼成会の教えが生かされ、堀越さんは苦境を脱することができた。現在、光商社で堀越さんは相談役に就き、受け継いだ弟が経営に当たっている。

徳の積み重ねが、 未来につながっていく

堀越さんが代表取締役を務める光企業では社是に「真面目」「習学」「感謝」「奉仕」「継続」の五項目を掲げ経営に当たっている。これらは、立正佼成会で学んだことから想起された言葉だ。

立正佼成会との関わりは、祖父の代に遡る。立正佼成会の存在を知った堀越さんの祖父の勧めで両親が入会、当時は東京の本部に通っていた。その後、取手教会が発足し、母は管財の役を務め、信仰を受け継いだ堀越さんも壮年部長や支部長、渉外部長を歴任。家族で信仰活動に励んできた。

堀越さんは「徳を積むこと」が自分や周囲に良い結果をもたらすと実感している。「立正佼成会でお役を務め上げられたのも自分一人の力ではありません。両親が積んできてくれた徳があったからこそと思っています」。会社が順調に成長をしてきたのも、徳を積んできたおかげと信じている。「会社経営においても、利益以上に喜ばれる仕事をしようと取り組むことで良い結果につながっていきます。仏さまから守られていると感じますね」と語る。

また、堀越さんは自社の経営だけでなく地元地域の盛り上がりにも貢献している。代表的な活動の一つに、取手市民になじみ深い夏の風物詩「とりで利根川灯ろう流し」への参画がある。例年二千人が訪れるこのイベントは、元々は四十五年前、取手教会の発足と共に立正佼成会の会員が始めたイベントだった。堀越さんは、地域の人たちが誇り

をもってつくりあげるイベントにしたいと実行委員会を立ち上げ、委員長として主導している。現在、取手市をはじめ二十の関連団体や地元企業の協力により運営され、地域に受け入れられている。

そして、2018年には新たに喫茶店を開業。七十四歳になった今もお堀越さんは精力的に活動をしている。「店舗物件を購入して賃貸で借り手を探そうと思って、掃除したりしているうちに自分でやっつけてしまおうという流れになってね（笑）。かつて駅前で喫茶店を営んでいた店主と縁があり、運営をお願いしているんですよ。たまに私もカウンターに立ちますよ」。堀越さんは、地元の人たちの楽しみにつながる場をつくれることに、喜びを感じながら喫茶店を営業している。

誰かに喜んでもらえることを主眼に置いて行動を積み重ねていった先に、人とのつながりや価値の創造がある。両親が徳を積んでくれたおかげで、堀越さんは良き人の縁や導きにつながったと思っている。これからもまた、一つひとつに感謝をしながら丁寧に善い行ないを積み重ね、堀越さんは未来を信じて行動を続けていく。



●ほりこし としお

1946年、茨城県生まれ。茨城「六花の会」代表世話人、取手教会「六花の会」世話人。72年、27歳で父と共に道路清掃を行なう株式会社光商社を創業。現在、廃棄物の回収運搬業である有限会社光企業代表取締役。また、地域の清掃活動や地元イベントの実行委員長を務め、さらに喫茶店を開業するなど地域貢献活動も精力的に行なっている。